

宗教復興の潮流

『現代宗教』編集委員会

世界的に宗教復興の気運があると唱えられるようになったのは、一九八〇年代の前半だろう。中東のイラン革命、アメリカ合衆国での福音派の台頭などが主な観測材料だった。一九九〇年代に入るとこの認識は広く共有されるようになってきた。ソ連や東欧の社会主義国家の崩壊により、これらの国々では宗教勢力の顕著な発展が見られるようになった。旧ユーゴ地域の紛争は民族紛争であると同時に、宗教文明を背後に背負った紛争でもあった。湾岸戦争では宗教よりも民族を掲げてきたアラブ・ナシヨナリストのリーダー、サダム・フセインが、自らがイスラムの礼拝に加わるさまをテレビに放映させ、世界のイスラム教徒の連帯を訴えた。

アメリカの政治学者、サミュエル・ハンティントンが世界の主要な紛争の原因が宗教に支えられた文明間の対立にシフトしてきているとして、「文明の衝突」の理論を唱えたのは一九九三年のことである。二〇〇一年九月一日のアメリカ同時多発テロ以降の世界情勢は、「宗教復興」とからみあつて進行してきた「文明の衝突」の

プロセスの現実化であるかのようにも思われた。そして、この悲劇的事件以降、キリスト教世界もイスラム世界もあるいはそれ以外の世界でも、人々は宗教を恐れて遠ざけたり、宗教から逃れようとする素振りを見せながらも、他方で宗教にさらに強くひきつけられ、そこによりどころを見いだそうとしているかのようである。

日本ではどうか。日本でも一九八〇年代には、「宗教回帰」や「宗教ブーム」が唱えられるようになっていた。「新新宗教」の発展が目立つ一方、宗教教団にしばらくするのは好まないが、「霊性」や「スピリチュアリティ」には強くひかれるという若者が書店の「精神世界」のコーナーに集まるようになったのも八〇年代のことだろう。やがて、宗教教団が市民をまきこんで引き起こすトラブルが深刻になり、霊感方法や合同結婚式（以上は、統一教会や出版社への抗議デモ（幸福の科学）などが人々の耳目を集めるようになった。きわめつけはオウム真理教による度重なるテロ事件で、一九九五年三月にクライマックスを迎えた。

オウム事件以後は、「宗教ブーム」どころではなく「宗教はなれ」が主要な動向であるかに見えた。伝統仏教教団も新宗教教団も社会環境が宗教教団にとって、ますます厳しいものになってきていることを認めている。

お布施の減少や支持者の高齢化を嘆く声も頻繁に聞こえてくる。「宗教教団」が勢力の拡充に成功するというような意味での「宗教復興」は、二〇〇五年の今もたぶんさほど期待されてはいない。

だが、にもかかわらず、宗教への関心が高まっているような気配もある。たとえば、巡礼の人気である。どうもこれは日本だけのことではないようだ。現代人に恰好の伝統的な宗教的修行として、新たに巡礼に親しもうとする人が増えているが、現代日本人にとってこれはぴったりのもののようである。また、死の意味や死の作法や死の看取りについて関心が世界各地で高まるにつれ、かつて日本人が親しんだ、死をめぐる宗教的な文化の姿へと思いが向く機会も増大している。自らを振り返ってみれば、死に向き合うための心の道具箱はあまりに貧弱である。死だけではない。苦しみや悲しみに見舞われて心を立て直す柱となるものも、自らを律する規範を提供してくれるはずの宗教的な倫理にあたるものも見当たらない。このような状況の下で、宗教へと人心が向かう気運が生じているのではないか。

では、日本人にとって「宗教」とは何か。あいかわらずキリスト教は外来宗教であり、庶民の生活になじんでいない。イスラムはまだまだ遠い。新宗教は歴史が浅く、

信頼に足りるものかわからない。「無宗教」と自称するのは情けない。そこで、仏教が浮上してくるのかもしれない。昨今、日本の著述家の売れ行き良好書に仏教に関わるものが多いようだ。世界的な「宗教復興の潮流」があるとして、日本の中のこうした仏教への関心増大を「仏教復興の潮流」とよべるのだろうか。

『現代宗教2005』は以上のような諸問題を取り上げ、さまざまな角度から掘り下げることを目指している。——世界の「宗教復興の潮流」の実態はどのようなものなのか。宗教復興が生じているとして、その理由は何なのか。また、日本では「宗教復興の潮流」にあたるものが存在するのか。世界各地の動向と日本の動向とはどのような関わっているのか。

もちろんかたんに明快な答が見えてくるものではないだろう。むしろ、多様な視点からの考え方が提示されることにより、読者諸氏への問いかけとなることが望ましい。「宗教復興」はまた、読者諸氏自身の問題でもある。自らが「宗教復興」にどう関与しているか、どのような距離をとっているのか。そこまで問いが進むことを願っている。

(文責・島蘭進)